
あたしと君とあなたの心に

絵の具箱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あたしと君とあなたの心に

【Nコード】

N7784L

【作者名】

絵の具箱

【あらすじ】

私の気持ちであり、君の気持ちであり、あなたの気持ちであり、そんな詩を書いていたらな、と思います。感じたことを言葉にできたら、形にできたらいいなと思うのです。

1・片思いをする僕（前書き）

片思いというのは切ないもので、しかも、可能性がないとか、自分に自信がないなんて場合は悲劇です。辛いです、正直。それでも、誰かを好きになることをやめられないのはおかしい話ですね。片思いをすると、もっと、可愛くなれたら、綺麗になれたら、かっこよくなれたら、そういう気持ちでいっぱいになる日々です。

1・片思いをする僕

明日になれば
何か変わるのかな
きつと変わらないんだろうな

夢見た
楽しい君との日々
嘘だって
冗談だって

だって
だって

僕は君に話しかけることさえ
できないっていうのに

そんな次の日は
無駄に胸ばかりが
うるさくて

なんだか
恥ずかしくて

誰も僕のことなんか
見てやしないのに

明日になれば
何か変わるのかな
きっと変わらないんだろうな

情けないけど
これが一番
僕らしいってことも
わかっていて

だって
だって

僕は僕とずっと一緒にいるから
嫌でもわかる

そうだけど
たまには僕だって
かっこよくなりたい

なんて思うんだよ
たまには、ね

だけど
だけど

一生のうちの
ラッキーを使い果たしたとしても

明日になれば

君の笑顔が僕に向けられる

きっとそんなことはないんだろうな

2・線引き(前書き)

友達以上恋人未満なんて、歯痒い関係ですね。相談にはのれても、直接幸せにはしてあげられないんです。

2・線引き

何もできなかつたな
弱気な自分と

冗談の一つも

言えなかつた僕は

また君を笑わせてあげられなかつた

「大丈夫？」と聞いたけど
大丈夫じゃないことくらい
わかっていたよ
笑っていても
声は泣いていたから

たとえば
君を悩ます種が僕だったら
いくらでも
解決してあげられたのにな
たとえば
君を悩ます種が僕だったら
泣かないよう
抱きしめてあげられたのにな

しばらくすると

君はまた

笑うようになって

相談にすらのれない僕は

また君から少し離れた場所にいる

君の幸せを望んでいたけど

それが僕とじゃないことくらい

わかっていたよ

仲が良いって

ただそれだけだったしね

たとえば

君を悩ます種が僕だったら

いくらでも

幸せにしてあげられたのにな

たとえば

君を悩ます種が僕だったら

笑えるよう

大切にしてあげられたのにな

3・ほたる（前書き）

街灯や街中の光を見ながら思いついた詩です。まるで自分の存在を
アピールするように人は明かりをとすな、と。蛍のように光れた
らしいのにな、と。

3・ほたる

寂しくないよう
明かりをともす
色とりどりの光に
包まれるように

誰かが気づいてくれますように、と

同じ色をともした
大切な誰かたつた一人を
いつでも見落とさないように
あたしは元気です、と
笑う代わりに

寂しくないよう
明かりをともす
色とりどりの光に
包まれるように

あなたがあたしに気づいてくれますように、と

蛍のような
きれいな光ではないよ

もつと人工的で
もつと計算されて
なんだか
薄汚れた白熱電球みたいな
そんな光だよ

あたしは人だから
正しくは生きられなくて
貪欲でいつまでも
ここにいたいなんて
思っていたの

寂しくないよう
明かりをともす
色とりどりの光に
包まれるように

あなたの光を見失わないように、と

あたしがこの世から
消えてしまふとき
一度だけ
青く蒼く光ろう

きちんと空になれるように

あなたの目は
空として、きれいな景色として
写るよじつに

4・家出少女(前書き)

家族というのは難しいもので。一番近い関係になったり、一番遠い関係になったりします。しかも、赤の他人じゃないことが、親子や家族という関係性をさらにやっかいにさせますね。未だに、家族の定義は何だろう、と考えてしまう私です。

4・家出少女

追い出された

境界線の外

あたしは自由を手に入れる

身体は恐ろしく軽いのに

なんだか胸のあたりが

やけに重い

きつと

傷つけあうことしか

できないのなら

離れることが正解なのかもね

だけど

それでも

そんな正解は

寂しすぎたんだと思う

この涙の意味を知るまでに

時間をかけすぎたみたい

だから

気づいた時には

遅かったんだよ、もう

手を繋いだ二人
境界線の中
あたしが無くしてしまったもの
羨ましいとは思わないのに
なんだか胸のあたりが
やけに虚しい

きつと
上辺を撫でるような優しさしか
もてないなら
離れることが正解なのかもね

だけど
それでも

そんな正解は
寂しすぎたんだと思う
この涙の意味を知るまでに
時間をかけすぎたみたい
だから
気づいた時には
遅かったんだよ、もう

幼き日
伸びた影
裸足でかけた
家までの道

ただあの日も

あたしは鍵を握りしめてた

鍵すら今は持っていない

帰り道はもうわからない

そんな答えを

わかっていたと思う

この涙の意味を知るまでに

時間をかけすぎたみたい

だから

気づいた時には

遅かったんだよ、もう

5・階段を登る（前書き）

大人になるということは決して簡単ではない。だけど我慢することばかりが大人になるということではないのね。一人のように見えて実は一人じゃない。なんで私ばかり、不幸ばかりと思っても、実は幸せ者だったりする。おかしいね。

5・階段を登る

あたしは
少し大人になった
泣いたり
わめいたり
しなくなった

心が崩れ落ちても
涙の止め方は心得た

寂しい、ということも
悲しい、ということも

なんだか
どうでもよくなった

違う

どうでもいいんじゃないかと
いちいちふらつくのは
やめようと思ったんだ

あたしがもってるものは
何も無い

ただ

あたしを支えてくれる人は
いるっていうこと

あたしのそばには誰もいない

ただ

あたしには大切にしたい人がいるっていうこと

生きていると

毎日敵だらけだ

疑って疑われて

傷つけて傷つけられて

裏切って裏切られて

悲しいし

泣きたくなるようなことが多すぎてる

正直怖い、とても

あと何回
あと何回

こんな思いをして
生きていくんだろう

そんな風に思う毎日

だけど

その中にも

笑ったり

嬉しいことがある

それはきつと

あたしが一人じゃないって
いうことなんだと思う

あたしを励ましてくれる人は
元気でいるだろうか

あたしを頼ってくれる人は
悩んでいないだろうか

あたしの大切だと思う人は
幸せだろうか

笑ってほしい
笑ってほしい

ただ

ただ

切に

6・脱出したい世界（前書き）

リアルな世界というのは時にすごく怖くて、嫌になる。巻き戻しも、やり直しもできない世界で、上手く生きていくのはすごく難しい。だから、みんなこうやって画面上で何かを伝えたくて必死なんだ、と思う。

6・脱出したい世界

きつと

画面ごしに

60億人分の1人を
探している

余計なことを
言わなくてもいいことを

誰かに伝えたくて
それは恐らく
わかってほしかったことで

こぼしていく
こぼれていく

面倒くさいことは一切ないから
だって
嫌になったら電源スイッチ押せば
すんでしまうから

安心して
言葉や気持ちを
書き綴る

今日あったあんなことやこんなこと
伝える人は未だに二次元じゃ見つからなくて

画面ごしに

60億人分の1人を
探している

嬉しかったことを
悲しかったことを

誰かに伝えたくて
それは恐らく
わかってほしかったことで

情けなくも

暗闇の中
小さな箱の前で
涙流したりする

怖いんだもの
リアルというのは

人は生まれる
人は死ぬ

人は傷つき
人は悲しむ

たった一人じゃないことを
生まれたときから

あるいは

生きていると
他人からそれを知り

愛に飢え
寂しくなる

そのうち
思った

嘘でもいいと
ずっと
そばにいてくれるなら

リアルでなくてもいいと

誰も傷つけずに

誰も傷つくことを見ずにいられるなら

まやかしてでもいこと

臆病者の唄だな

それも知っているよ

7 · i · m home (前書き)

私は昔からいわゆる鍵っ子でした。

7 · i · m · h o m e

ずっと

帰る家を探していました

大きなかばんを背負って

寄り道した先で夕飯の匂いをかいで

カラスが鳴くのを待ちました

首には鍵を

大切にぶらさげて

誰もいない家に

あたしは戻るのでした

ずっと

帰る家を探していました

夕焼けが綺麗だと少し嬉しくて

急ぎ足で朝来た道を戻り始める

玄関に着くまでは寂しくない

つま先立ちして

開けた冷蔵庫

あたしもレンジで
温めてもらえたらいいのに

寂しいというより
まるで居場所がないみたいで
膝を抱えて良い子で待っていた
笑った顔が見たくくて
少しでも褒めてもらいたくて

ずっと

帰る家を探していました

「おかえり」と言ってほしくて
「ただいま」と言いたくて
今日も小さく呟いているのです

もうわかるよ
何が大切なのか

もうわかるよ
何を大切にするのか

もうわかるよ
少なくとも、今なら

8・嘘と綺麗事の意味（前書き）

嘘ってなんだろう。綺麗事ってなんだろうって。

8・嘘と綺麗事の意味

もしもそれが本当なら
あたしは手をつなぐ

そうではなくて
手をつなごうとしてみる

勇気をだして
はねのけられることも覚悟して
愛の言葉を口にする

怖がらないで
きっと大丈夫
何もかもは上手くないかない
だから
怖がらないで

あたしは綺麗事は嫌い
嘘つきで優しい
そして孤独にする

だけど
わかったの

嘘をつくのは怖いから
失うものがあるということは
つまり

守るものがあるということ
優しくしたいのは大切だから
孤独だと思うのは一人じゃないから

明けない夜はないとよくいうけれど
長い夜があることも
それを望んでしまっ日があることも
あたしはよく知っている

それと同じように

ある日ふと
人生に絶望するように
ある日ふと
生きててよかったと
思える日もくるから

ああ

これもまた綺麗事かしら

もしもそれが本当なら

あたしは手をつなぐ

そうではなくて

手をつなごうとしてみる

勇気をだして

はねのけられることも覚悟して

愛の言葉を口にする

怖がらないで

きつと大丈夫

何もかもは上手くいかない

だから

怖がらないで

9・変化(前書き)

まとまりがないです。正直、思いついたままに書きました。

9・変化

いつもそばにあるとは限らないよ
いつか終わりが来るんだもの

いつもそばにあると思ったものは
いつの間にか姿を消して
手をふっていた

失くしたものの
落としていったもの
さよならも言えなかった

そんなもんだよ、と
言われたら

そうね、きつと
そんなもんなんだと思うのだけれど

それが成長というなら
それが大人というなら

それって少し怖いことだね

終わりがきたことにも
気付けなくて
始まりを迎えたことにも
気付けなくて

立ち止まったままだと
思っているとしたら

それって少しもつたいないね

変わることは悪いことではないよ
変わることは悲しいことではないよ

同じものなんて
一瞬でも存在しないから

同じものを望むから
存在すると思っただけでさ
だから大丈夫っていうわけでも
ないんだけど

今の君が
一歩踏み出すなら

今のあなたが
変わっていくなら

今のあたしは

それを

確かに目撃しよう

その一瞬を逃さないように

10・会えるよね

理想と夢をつめこんで
君に逢うつもりだったのに
叶わなくなった命の旅
話せたとしたなら
君は何と言っただろうか

名付けるとしたら
君が恥ずかしくないような
だけれど
特別だとわかるような
そんな名前にしよう

忘れないよ
また会えるよね
いつか君に会えたら
抱きしめよう
やっと会えたね、と
君がわからないと首をかしげても

現実はどうやら夢ではなくて

頬をつねっても
朝がきても
変わらない事実として
胸に傷をつけた

小さな手、動かない拍動
空気が淀んで死んでいる
だけれど
なぜかあたしは生きていて
熱い涙を流す

寂しいよ
また会えるよね
何の確認かわからずに
それでも強くそう願う
心配しなくても
あつという間さ
君が泣いて生まれる日

大丈夫

君は一人じゃないよ
最後まであたしが死ぬまで
ずっとそばにいるよ

力の入らない足で

君は君の人生を歩むんだ

忘れないよ

また会えるよね

いつか君に会えたら

抱きしめよう

やっと会えたね、と

君がわからないと首をかしげても

11・たった一人（前書き）

たった一人を幸せにしたい。だけれどたった一人を幸せにするのは
こんなにも難しくて。分かち合えたらいいのに、と何度も思う。

11・たった一人

あなたは強いね、と
言われた日があった

そんなことはないですよ、と
笑って見せた

あの人は
あたしが泣き虫だということを知らない

あなたは優しいね、と
言われた日があった

そんなことはないですよ、と
笑って見せた

あの人は
あたしが何人傷つけてきたのかを知らない

あなたはわがままでね、と
言われた日があった

そうですね、と

謝った

あの人は

あたしが我慢してきたあれこれを知らない

あなたはひどい人だね、と

言われた日があった

そうですね、と

謝った

あの人は

自分の傷つけた人たちを忘れている

人間のことなんて

解りそうで解らない

解りあえなかった時の

悲しさや寂しさは

傷つけられた

あるいは

孤独すぎる夜の

何倍ものダメージだから

諦めそうになるけれど

たった一人に
解ってもらいたくて
たった一人を
解りたくて

あたしたちは
今日ももがく

たった一人が寂しくないように
たった一人が笑えるように

たった一人の人生が
少しでも幸せであるように

12・君と僕、曇り時々晴れ（前書き）

空みたいになってきて大きな器だったら、心をもっていたら、無条件に君を想えると思っただんです。

12・君と僕、曇り時々晴れ

心が痛いなら
もう全部全部
はきだしてしまえばいい

汚くたって
真っ黒だっつていいよ
僕の心も
そんなものだから

君の愛や涙が
たとえ偽物だとしても
それでもいいや

僕だつて
何が本物かなんて
わからないのだから

怖がる必要も
裏切られる心配も
できやしない

飽きるほど
そばにいるから

そばにはいるから

一人ぼっちだとは思わないで
孤独の波にさらわれなくて

偽物もその気になれば
本物になり得るよ

嘘でもいい
冗談でもいい
いつそ何でもいい

君が笑ってくれれば
もう何でもいい

僕の心も晴れる
晴れなくても
きつと
曇り時々晴れくらいには
なるんだろう

遠慮はいらない
なんたって
僕は空なんだよ

遠慮はいらない
なんたって
僕は君を想う空なんだよ

13・正当防衛(前書き)

必要とされないことは、居場所が見つからないことは、しんどいですね。だっていてもいなくても同じっていうことだから。辛すぎて、辛すぎて消えてしまうことを選ぶなら、それは正当防衛になるのだろうか、と考えてるうちにこの詩ができました。叩かれるわけでも襲われるわけでもないけど、心が死ぬほどに泣いていたら、それは、正当に自分を守る手段として成り立つのでしょうか。

13・正当防衛

どうすれば

わかってもらえましたか

どこまで

頑張ればいいですか

うずくまって泣いた

誰にも気づかれないように

涙を見せると怒られた

弱虫だ、と 泣き虫だ、と

だから

できるだけ良い子に

できるだけ優しい子に

思いやり溢れる子に

必要としてもらえるなら

なんだって頑張れる気がしてた

どうしたら

あたしもそこに行けますか

どれだけ

頑張ればいいですか

かけよって後ずさった

居場所がないことくらいわかってた

行き場のない気持ち

それでも笑っていれば

そばにいられると思ってた

ねえ

あたしはここにいて

同じように息をして

同じように泣いたり笑ったりできるのに

それだけじゃダメですか

正当防衛が許されるなら

あたしは今すぐ

空へ逃げるのに

14・病人は病室で静かに眠る（前書き）

病人というわけではおそろくないのだろうけど、恋をすると誰でも少しは病むと思うわけです。なんとというか、「普通」ではなくなるでしょう。約束もできて、居場所もできる。未来が希望になって、だけど同時に怖くもなつて。傷つくのも、傷つけるのも、失うのも、とても怖いです。

14・病人は病室で静かに眠る

気がついたら
目を奪われた
ほんの一瞬
そんなありきたりな話

興味がなさそうな瞳
何かを
置いてきてしまったような横顔
でしゃばりなあたしは
そこから
あなたと一緒に抜けだしたかった

どんどん臆病になって
どんどん疑い深くなって
隣を歩いていたはずなのに
心が震えて今は少し遠いね

もう二度と
これが最初で最後だと

言ってくれたその言葉を
あたしは今でも信じていて

それでも違う未来が
訪れるかもしれない

それってきつと誰にもわからない
そうでしょう、ねえ

そしたら

あたしはやっぱり一抜けしなくちゃいけないのかな

どんどん好きになって
しまいには愛に変わった

置いてきてしまった気持ち
それはあたしのせいでしょうか

あなたがあなたでしかないように
あたしはあたしでしかなく
背伸びをしても届かない
しゃがんだって届かない
いつもあなたのことを見上げてた

あなたの背中を探してた

あなたの声を探してた

白い天井

小さな部屋で
鍵はかけないで

15・いのち(前書き)

命について、です。とりあえず。あたしは大切な命を失ってきました。大切な人も、大切な愛犬も。どうしようもない、やり場のない、そんな気持ちでいっぱいになって、涙が枯れるなんて嘘だと思いました。枯れるんじゃない、心の中に流れて行くんだと思いました。だって、明日からは、明後日からはまた日常というものに追われなくてはいけなくて、笑わなくちゃいけないから。私は言っておあげたかった、「もういいよ」って。「よく頑張ったね」って。「ありがとう」って。「ごめんね」って。それと同時に、そうやって言うってほしかったのかもしれない、誰かに。

15. いのち

死んでしまった命は
どこに行くのでしょうか

天国は本当にあるの
地獄は本当にあるの
神様は本当にいるの

それなら
どうか

あたしが大切に思う人たちは
天国にいけますように

おいしいものをたくさん食べて
仲間もたくさんいて
恋をして

ただどいつも笑っていられますように

泣かないでって
言おうと思ったけど
それはたぶん
あたし自身に送った言葉

寂しくて寂しくて
仕方がないのは
きつとあたしだから

目が覚めて
なんとなくわかった
身体がいつもより軽いということに

そして

目が覚めて
しつかりとわかった
一人ぼっちになってしまったということに

もう少しだけ寝ていたい
もう少しだけ君といたい

もう少しだけ笑わなくていいように
もう少しだけ泣いていられるように

もう少しだけ頑張らなくていいように
もう少しだけ一人ぼっちでいられるように

白い鳩が飛んで行った
君だったのかい

白い雲が流れて行った

君は乗れたかい

白い服を着て行った
あなたからもらったもの

あたしには
これくらいしかできなかった

遠くで声が聞こえる
あの時と同じ
命が始まったみたい

この気持ちは
どこにしまえばよかっただろう
この涙は
どこにしまえばよかっただろう

16・雑踏の中、目で耳で感じた時間（前書き）

新宿にいた時の話。人がこれでもか、といわんばかりに溢れていて、たくさん建物や商品や食べ物が溢れているのに、そこにいる私はちっとも満たされなくて。むしろ、どんどん寂しくなって、何をしていたのか、どこに行けばいいのか、一人が良いのか、誰かと一緒にいいのか、わからなくなって。足元ばかりを見て歩きました。立ち止まったときだけ、空を見上げていました。何がわかるわけでも、何が手に入るわけでもないけれど、それでも私は雑踏の中に埋もれてしまうのです。そして苦しくなるのです。

16・雑踏の中、目で耳で感じた時間

話声は次第に大きくなる

耳にはいつてくるのは

どうでもいいような世間話

誰かと誰かがくつついた、とか

誰ちゃんが誰くんを好きだ、とか

誰のことは嫌いだ、とか

もう仕事をやめたい、とか

そんな話ばかりだった

雑踏の中

ちっぽけすぎるあたしは

つま先とにらめっこをしながら

少し甘すぎて濃いコーヒード

大人になったような気持ちになって

消えるように薄れていくように

そんな感じで無口になった

歩いて歩いて

どンドン歩いて知らない街

何人かに話しかけられて

何人かにぶつかった
何人かについてこられて
そして結局ひとりぼっちに戻った

そんなことをあと何回繰り返すだろう

世界は同じような
紛い物で溢れているよ
世界はこれだけ広いのに
誰も誰かのかわりにはなれない

違うことが怖いんじゃない
本物が、本当のことが
わからなくなるのが怖いんだよ

そう言ったら
何人の人がそうだね、と
言ってくれるんだろう

改札の前

待ち合わせをしているわけでもないのに
何時間も突っ立っていた
誰か迎えに来てはくれないだろうか、と
誰かのことを待っていたんではないか、と
誰かとありえない確率で出会えはしないか、と

そんな風にして流れた時間

空の色が変わる時間を知った

17・黄色い帽子、黄色い傘（前書き）

黄色い帽子と黄色い傘を持っていました。みんな、そうでした。ランドセルの色は違っても帽子と傘は同じ色でした。でも、だんだんみんな好きな色ができて、大人になって、黄色い帽子と黄色い傘はどこかに忘れてきてしまうのです。近かったのに遠くなる。

それは誰かと出会って恋に落ちた時も同じで。近づいて近づいて少しずつ、くつついたと思ったら、同じだと思ったら、いつのまにか遠のいて遠のいて少しずつ。距離感を忘れてきてしまうのです。

いらぬいわけじゃないのに、忘れたわけではないのに。

17・黄色い帽子、黄色い傘

幼き日

かぶった黄色い帽子

おそろいの黄色い傘

今はどこにしまつてあるんだっけ

あの時は

雨の日さえ

なんだか

楽しかったような気もするし

あの時から

雨の日は

なんだか

胸が苦しかったような気もする

遠からずそれでも近くはない

大人になつて

黄色い帽子も忘れて

黄色い傘も置き忘れてきた

今は埃をかぶつて錆ついてるだろう

君と出会った

いつからだろう近づいて

いつからだろう遠のいた

今は30cmものさしで測れるくらいだろうか

君との距離

指で触れたら近づいたのに

それを絡めたら遠のいた

今は嘘っぽくなって我慢大会みたいで

遠からずそれでも近くはない

幸せの意味を見いだせない
なんて

あの日の僕はそんなことを
考えるとと思わなかったな

おやつがあると嬉しかった

昼休みが好きだった

カラスが鳴くまではしゃいでた

それだけで幸せだったのに

黄色い帽子は飛んでいく

ゴムはのびきって

黄色い傘は飛んでいく

こつもり傘になって

18・ツバメの羽の下で（前書き）

雨が続きますね。私は雨の日は静かで落ち着いていて好きですが、寂しくなるので嫌いです。そして眠れないです、はい。不眠になると、世界がぐるぐると嘘っぽくなっていくような気がするのなんなんだろう、と不眠のくせに起き上がれずに思うこの頃です。

18・ツバメの羽の下で

泣き止んだばかりの空の下
低空飛行でツバメは翼を広げる
空気は重くて
みんなが今にも泣き出しそうだ
あの人もその人も誰も彼も

結局眠れない真夜中の時を
墮落して捧げて
もしかしたら
今のが貴重な一秒だったのかもしれないと
杞憂したりする

お飾りみたいな手足を
動かして願うのは
明日を笑って過ごす君のこと
明日が晴れてなんとなくでも
いい日だったと思えること

願いは叶わず今日も空は泣く
葉の先から落ちていく雫

頭の先から受け止めて
現実に戻されて
また歩きはじめる

変わってゆくこと
時は流れてしまう
変わらないこと
心は流れていかないからって
言い訳するようにつぶやいたけど
どうしたかったのかはわからない

あれから眠れない夜が増えた
目をとじるのが怖くなって
ただただ一人 闇に溶けた
明日がくるなら
今日にさよならをしなくてはならない
その意味をよく知っているかい

祈った

祈った

祈った

それしかできないから

19・初夏（前書き）

暑くて暑くて、外を歩いているだけで目がくらみます。陽ざしに弱いというか、直射日光は日向ぼっこ以外ではなるべく避けたいやつです。そしてこの時期、嫌でもひからびたミミズが道路に横たわっていて、なんだか悲しくなってしまう。憂鬱になるのはそのせいですかね。

19・初夏

ひきちぎられたミミズのように
私は地面に横たわる
照らされたアスファルト
反射する光は
私を通り抜けてまた空へと還る

ああ

どうしてこつても
混ざりあえないのだろう

温かい言葉を
目の前に積まれて
心が淀んでいく
なんでだろう
きつとそれは
宝物にもなれるのに

暑い陽ざしに目が眩んだら
もう倒れても良いだろうか
いや、駄目に決まってる
外に出られなくなったら
私は本当に一人ぼっちだ

ああ

どうしてこうも

まともになれないのだろう

ただ少しだけ

そつと寄りかかせて

3秒目をとじたら

すぐに起き上がるよ

それだけでいい

それだけでいい

20・現実主義者（前書き）

現実主義者だね、厳しいね、とよく言われます。そして、たまに冷たいね、と言われます。だいたいそういうことを言うのは私のことをあまりよく知らない人からなんですけれど。

確かに、冷たいのかもしれないです。だけど、現実主義者ではなくむしろ夢みがちです。夢の中にいたいです。素直になれる夢の中に。

今回の詩もある人から言われたヒトコトでできました。やっぱり、傷ついたらんだと思います。多少なり。だけれど、きつと相手も傷ついたんでしょうね。本当に私は人の痛み鈍感で、鈍感で、鈍感で嫌になります。大切なものを、大切にできないなんて本当に嫌です。そのくせ、もう怖くて近づけない気がしています。また一人、誰かを失うことになりました。また一人、誰かから遠ざかることになりました。こんな風にしかできない自分が、なれない自分が、生きられない自分が、悲しいです。

なんておかしな話ですね。

20・現実主義者

「空っぽな顔にさせてごめん」
君に言われた3秒後に
私は自分が無表情なのに
やっと気がついた

悲しかったわけじゃない
それなのに
なんだか
胸がすーすーして

君がその後
悲しい顔をするから
私は本当に
自分が悪者になったような気がした

言い訳も
謝罪も
意味がない
だって

傷ついた君に
私の言葉は届かないし
きつと笑顔にできない

なんだか
納得がいかないのは
私も君のように
泣きたかったからかもしれないな

私はその後
全力で誤魔化した
全部全部無しにしたくて

だけど
だめだね

気がついてしまったんだ、私

君の言葉に
間違いなくね
私の心が
少し小さくなったことに

私の心が
少し固くなったことに

私の心が
君から遠ざかったことに

ごめんね

こんな風にしか
生きられないんだ

ごめんね

優しくないね、私

21・突発的な心（前書き）

題名の通り、突発的にできたものです。なんですかね、優しさとか、心配とか、気遣いとか、そういうものには上手く反応できないんですよ。拒絶反応ではないんですけど苦笑）世渡り下手です、きつとみんなにわかってもらいたいわけではないから、私は今もこうやって生きてるし、生活してるし、学校にも通って、なんとなくふらふらできているのだと思います。人付き合いがもう少し上手くなればいいな、と思ったりもするのですが、一人でもいい、自分をわかってくれる人がいるなら、それは何千倍とか、それくらいの心強さにかわるので。警沢は言いたくないし、言いたくもない。今だって十分に幸せだって思えるように。

21 突発的な心

屁理屈並べてみたら

自分の寂しさに気付いた

だけど

素直にもなれない

だから

結局のところ

強がって

笑ってみせて

手を振る

大丈夫、と

何度も口にして

頑張れ、と

何度も言われた

そのうち

私は酸素に逃げられて

浮きあがれない

沈んでいく身体

もういつそのままでいいか

歪んだ視界の先に

上手いように太陽が笑う

それが

優しさだということも

心配や気遣いだということも

わかっていたよ

わかっていたよ

それでも

私は何もできない

酸素には逃げられたままで

手足は冷たいままで

走り出した裸足で あの道を

声を枯らして泣いた あの日も

嘘を重ねて積み上げた 壁も

全て崩れて

小さな欠片になった

私はその欠片を

拾い集めては歩く 歩く

色とりどり

散りばめられた日々

ハッピーエンドに期待している

そんなこと言ったら

笑われてしまうかな

遠ざけて

遠ざかった

近づく術など
もちあわせてもいないのに

22・早朝、鳥の鳴く頃に（前書き）

そんな時間帯にできちゃったものですから苦笑)

なんというか、今新しい小説が書けそうな予感がして。なんとなく、書きたいなっていうお話があつて。それが、生と死についてのお話なんですけど。

生きたいっていう人もいれば、死にたいって思う人も同じくらいいるんじゃないかなつて。だけど、みんなそれぞれ事情を抱えている。いつそ、死んだら楽になれるのになつて思うけれど、立场上だったり、家族を考えるとできないとか、実際死のうと思つたらできなかつた、なんてまあそれぞれに。

逆に、難病と闘っている明日消えてしまふかもしれない命、戦場で無差別に巻き込まれていってしまう命、なんていうこともあるでしょうし。

色々ですよ。

これだけ人であふれていれば、嫌でも人生の数なんてたくさんあるでしょうしね。

私は、生きようとする事と、死のうとすること、どちらも正しいと思います。その人がそうしようとしたのなら、それはその人にとっての正解だろうし、正しい道なんですよ。だけど、そんな簡単に決心できないから、人生に揺らいでしまう。そうすると、その先は？どうしたいの？生きたいの？死にたいの？頑張りたいの？諦めたいの？良いことって？悪いことって？

そんな疑問ばかりと直面してそのくせ答えらしい答えが見つけれ

ないんだから、あーあ、と私は思っています。

病むわけでもなく、ちえっと思ってしまうのです。

22・早朝、鳥の鳴く頃に

くだらない、と
君は嘆いたけれど
その世界に
君は生まれてしまつて

もう死にたい、と
君は嘆いたけれど
その世界に
君は生きているんだよ

良いことあるさつて
簡単に言われて
なんだか涙があふれた

悔しかったのか
悲しかったのか
よくわからなかったけど
嬉しくはなかった

叫んだつて
無駄なんだつて
思い知らされたあの日

胸にぽっかり空いたままの
穴はふさがってくれない

都合良くはいかないもので

時間がたてば

世間と自分と

未来と嫌でも

向き合わなければいけないくて

だから

もういいやって

放棄しようとしたけれど

命も人も

捨てられない中途半端な自分がいて

諦められたら

どんなによかっただろう

手放せることができたら

どんなに楽になるだろう

そんなことばかりを考えて

生き延びていたら

いつの間にか

大人になっていた

本当はまだ
小さな子供のままなのに

情けないような
わかってはいるんだよ
頑張らなくちゃいけないことも
頑張っている人がいることも

でも

そんな立派なつくりになってないよ
転んだ傷はまだ痛むよ
繋いだ手も離されるのが怖いよ
そんな臆病者の弱虫の
なれの果てが自分にそっくりで

鏡の前で座りこんだ

くだらない、と
君は嘆いたけれど
その世界に
笑っている人もいて

もう死にたい、と
君は嘆いたけれど
その世界に
懸命に生きようとする人もいて

くだらない、と
君は嘆いたけれど
その世界に
僕も生まれてしまつて

もう死にたい、と
君は嘆いたけれど
その世界に
僕も生きているんだよ

どうすればいいの、なんて
誰かの耳に届けばいいのに
どうしたらいいのか、なんて
答えが出せたら
それが一番良いのに

23・連結（前書き）

ぐわーっとかいたものを連結しただけの詩です。相変わらずの情緒不安定で申し訳ないです、はい。

一人は寂しくて嫌だから

みんなに優しくして

みんなに良い顔をして

大切にされたくて

一人ぼっちにはされたくなくて

だけど

そのうち

本当に大切な人ができて

嬉しくて、とても

甘えてばかりいて

傷つけることもきつとたくさんあって

一番大切な人を

一番大切にできていない人間なんだと思います、私は

素直になるといのは

素の自分になるといこと

素の自分は飾れないし

融通もきかないし

優しくもないし

わがままで

泣き虫で

迷惑ばかりかけてしまう

そんな自分を好きになってもらうのは

難しいですよ

というより

そんな自分を変えることが難しいです

ずっと(というわけではないかもしれないけれど)

心に穴があいていた人間にとって

誰かのためのスペースを作るということは

誰かと一緒にいるための余裕をもつことは

難しいです

何が言いたいのかわからなくなってしまいました
すみません

23・連結

拒絶しかできない
近づけない
優しさには
上手く笑えない

わかってほしくない
わからないままでいいよ
そう言って何度
頑丈な壁をつくっただろう

無意識にでもぞつとする
その感覚を
私は体にもっている
そしてそれは
私をゆっくり蝕んでいく

嘘が本当になって
本当が嘘になって
世界はひっくり返ってしまった
頭の重さに私は耐えられない
足の軽さに私は飛ばされそうになる

ああ

このまま

ずっと

夜の海に沈んでいたい

このまま

ずっと

深海から光をみていたい

そうしたら

もう

傷つかずにすむでしょう

そうしたら

もう

泣いたってばれないでしょう

海水に混ざった涙を

海流に流れた涙を

私は見送って

何でもないみたいに笑う

何でもないみたいに笑う

元気なふりしてため息一つ
強くなつたふりして
大声で泣いた
一人でも良いと言つたのは嘘だけど
それじゃあ、どうして…

一人にならない努力つてなんだ
愛想が良いこと
話し上手なこと
誰よりも優しいこと
相手を思い遣れること
大人であること

いくつこなせるようになったら
それがわかるようになるのだろう
いつになったら
大切にされていると
わかるようになるのだろう

大切なものほど
甘えてしまうから
きつとたくさん傷つけてしまう
そりゃ
去っていってしまうわけだ

結局変わらないと

だめだっていうことで
それはわかっ
ていて
でも変われなくて

甘ったれの弱虫の言い訳

叫んだって叫んだって
意味がないんだって
だって
声がでないもの
だって
届かないもの

24・Dear Friend(前書き)

友達に贈る詩です。

何があっても生きていてよかったですと思うわけです。

24・Dear Friend

それはあなたを蝕んでいくのね

ゆっくりと

だけど

確実に

ねえ

それってどういう気持ち？

悲しい

苦しい

寂しい

私には

きっとわからないね

だって

私は

あなたより健康なもの

だから

私はあなたのことはわからない

だから

私はあなたに同情なんかしない

だから

私はあなたの前で泣いたりしない

ただ

ただ

あなたのそばにしよう

なんでもないみたいに

あなたの壊れそうな弱音をきこつ

くだらない話ばかりして

いつもみたいに

しょうがないなあ、と怒ってもらおう

ああ、でも

あなたはあなたでなくなるね

だけどさ

普通つてもともと有り得ないから

あなたがあなたじゃなくなっても

それが

今は異常でも

いずれは

それが

普通になる

慣れるんじゃないよ

あなたが

少し形を変えるだけ

少なくとも

私の目にはそう映る

あなたが

死ななくてよかった

生きていてくれてよかった

私は嬉しくて嬉しくて
あなたを抱きしめる

あなたの手を繋ぐ

25・神様の計測（前書き）

24・のDear Friendの続編

本当に神様は不平等で

怠け者だと思ってしまうのです

だって

だって

幸せになるべき子が

幸せになれないなんて

そんなの私は納得ができない

笑顔でいてほしい

私には何ができるのか

考えて考えて

今度は自分の価値を見失いました苦笑

25・神様の計測

自分の重さを量ってみたら
どうやら1gより軽いらしい

自分の命の長さを聞いてみたら
どうやら人よりは短いらしい

自分の価値を見てみたら
どうやら1円にも満たないらしい

それなら
それなら

どうして神様
私はここにいるのでしょうか

私という名のこの身体は
誰のために
どこにいくために
何をするために
産み落とされて

命を終えるの

背中についた名札や値札は
太い糸でくつついて離れない

数え切れない

私を示す文字や数

記号のようなそれらは
輝くこともなく

むしろ黒く滲んで
心に侵入してくる

そして

私は

私がいらないまま

私がいらないまま

自分の重さを量ってみたら
どうやら1gより軽いらしい

自分の命の長さを聞いてみたら
どうやら人よりは短いらしい

自分の価値を見てみたら

どつやら1円にも満たないらしい

それなら

それなら

どうして神様

どうしてなの

あの子は今日も泣いているよ

明日が怖いと泣いている

神様

不平等だよ

あの子が泣くなんておかしいんだよ

あんなに

頑張ってきた子なんだから

あんなに

優しい子なんだから

ちゃんと見ててよ

ちゃんと見ててよ

ちゃんと

あの子に笑顔をあげてよ

私の足を奪えばよかったんだよ

神様

神様

26・厚い厚い皮（前書き）

いつの間にか、大人になるにつれて、物分かりがよくなるにつれて、誰かに頼ったり甘えたりそういうのが下手つぴになる気がします。

一人で立てなきゃダメなんだって

そのためには

しんどい時も悲しい時も

平気なふりをして

あとできっと

苦しくなるなってわかっていても

そうすることしかできない

そんなふうにしか過ごせない

本当は

笑えないし

本当は

泣きたいのに

そんな気持ちの詩です。

仮面ではなく

生きてくついで

自然と身についた皮

ある種の

自己防衛なのかもしれません。

26・厚い厚い皮

綺麗なものばかり
溢れた世界じゃないから
今日もどこかで
誰かが泣いている

無意味だとさえ
思えてしまう日常で
絶望の少し手前
不幸の少し手前
そんなところに
立っているような気がした

まじないのように
言い聞かせてる
まだ大丈夫、まだ大丈夫
倒れたらもう
起き上がれないと思うから

夢から醒めて涙を流す
朝陽を浴びて
思い出せなくなった夢の中
きつと私は悲しかった

無意味だとさえ

思えてしまう感情に
今もまだとらわれて
むしろこだわっている
ただ怖いから、向き合えずに
わからないふりしかできない

嘘つきになりきって

言葉を並べただけ

そうじゃない、そうじゃないよ

伝えたいのは

そんなことじゃなかったんだよ

今更、遅い

そこまでわかりながら

私は笑ってみせる

27 宇宙人（前書き）

宇宙人に会いました。とても怖かったです。足が震えて、だけど私
がまだ人が好きだから逃げることができました。

27 宇宙人

寂しくて泣けるから

怖くて泣けるから

まだ大丈夫だつて思えた

一人じゃないなつて思えた

だけど

それもやっぱり苦しくて

よくわからなくて

つのつた奇立ちは

傷ついた方が楽だよと教えてくれた

諦めようかと思つたけど

君のこと思い出して

だから

目の前の宇宙人から逃げ出せた

きつと

相手の目にも

私は地球外生命体に見えたんだろっけれど

優しさじゃない

温かさでもない

ただの押し付け

ただの押し売り

力まかせにとんでもないものを
渡されるところだった

まだ

足が震えることを知った

そして

人間が嫌いだと思った

こんなにも

愛しいと想える人間だって

私にはいるのに

神様は優しくくない、ちっとも

生きにくい、とても

28・なりたいもの（前書き）

来世はできたら人間以外で、と思うことがあります

動物は

言語はなくても

超音波だったり鳴き声で

コミュニケーションをとることができますし

何より

人間ほど

複雑で面倒な心は

持ち合わせていないでしょう

本能のままに生きる、というのがしょうか

眠いから眠る

食べたいから食べる

といったように

素直ですよね

生き残るため

子孫を残すため
毎日きちんと生きていく動物をみると
心が清らかになります

ただ

私は

やはり誰かを愛したいので

どうしようもなく

理論づけられないような

そんな気持ちで

誰かを愛したいので

そうしたら

やっぱり

人間に生まれてくるしかないのかなと
思ってしまう苦笑

それは

複雑で面倒な心をもっているからこそ
できることなんですよね、きつと

孤独になりたいと願う人も

寂しくて仕方がない人も

誰からも必要とされていないと嘆く人も

痛みでしか自己存在を感じられない人も
生きている意味がわからないという人も
きっと

人間らしい人間なんだと思います

きちんと

心をもっているから

痛みも弱さもわかっている人だから

そんな風に思うのだと思います

弱いことは悪いことじゃないです

悪いのは弱いことを責めて

余計に自分に優しくなれないことです

言いたいことが何だったか

もはやわからなくなってしまうましたが

そんなこんなで28番目の詩です笑

28・なりたいもの

孤独になりたい
寂しがり屋の心は
寂しくならないように
そんなことを願った

傷つくのも悩むのも
もうたくさんだ、と

だって
だって

みんなの中
自分の存在証明証
それがなければ
とてもとても生きにくい

なんて、笑える話
一生かかっても手に入るか
わかりやしないのに

生まれ変わったら
人間以外に
なれますように

そんなことを願った

生きる意味を探すのは
もうたくさんだ、と

だって
だって

望んで

生まれてきたわけじゃない
気がついたら

この世に生きていたんだもの

なんて、悲しい話

生きたくても生きられない人も
今命を失くした人だっているのにね

生きてるよ

呼吸をしてる

だけど

とても苦しくて

涙が出るのは
どういうことなんだろう

誰か教えてくれませんか
手を握ってくれませんか

少しだけ抱きしめてくれませんか
私の名前を呼んでくれませんか

そうしたら

明日は朝日の眩しさにも
人に埋もれてしまうような錯覚にも
心ない荒んだ見えない誰かにも
立ち向かえる気がするから

誰かを心から
想えるような気がするから

29・頭とつながる笑顔について（前書き）

とある方から

「笑顔でいると、心が悲しくても頭が勘違いして幸せな気持ちになれるんだよ」と

素晴らしい笑顔で

教えていただきました

それをきいたとき

思わず顔がひきつった（と思う）私は
ずーっと悶々としてしまいました

なんだそれ、と

なんだそれ

なんだそれ

確かに笑顔って

すごく素敵だし

誰かの笑顔を見るのは

好きですし、元気をもらいます

しかし

しかし、ですよ

やっぱり受け入れられない苦笑

こつちって

相手のヒトコトで

うだうだしてしまふ私は
幸せには遠いのかな

笑顔って難しいんだもの

29・頭とつながる笑顔について

人は笑うと頭が勘違いして
幸せな気持ちになれるらしい

なんて
教えてもらった

そうか

じゃあ

笑っていられば幸せになれるのか

ずいぶん

調子の良いことを言ってくれる

そんな風に思ってしまう私は
きつと卑屈で偏屈

だけれど

そんなこと知りたくなかったよ

そんなこと言われたら
ずっとずっと
笑っていないくちや

まるで
幸せじゃないみたい

それに

笑っていない人は
泣いてしまう人は

ずっとずっと
頭が勘違いして
不幸だと嘆いてしまっ
てことじゃないか

幸せになることを
笑顔でいることを
押し付けないでよ

それがなきや
まるで
負け組のような
可哀想な人のような
そんな風に
くくらないでよ

ねえ

ずたずたのぼろぼろになっても

無理に笑っているあの子は幸せになれる？

幸せなんかいらないよ、と

嘆くあの子は幸せになれる？

そんなあの子はだあれ

きつと

鏡の前で毎朝気を張っているあなただよ

30・素直と(前書き)

素直になれない

甘えられない

だったら何が悪い

だったらどうすればいい

もういいやって諦めてみる
そっちの方が楽だし
悲しくもならないし
何より身軽になれる

それでも

諦められないのは
そんな身軽さはいららないから
いらないんじゃないかと
その軽さは
心の虚しさと比例すると
わかってるから

不幸より孤独が怖いから

誰かのせいにしてみる
そっちの方が楽だし
世界は私の味方になるし
悲劇のヒロインでいられる

あなたのせいじゃないよ、と

慰められて
優しくされて

私は成長をとめる
乾かしそびれた羽根は
結局しわしわのまま
空も飛べずに

ただ

殺されるのを待つしなくなる

見上げた空の綺麗さに
感動するくらいの素直さを

相手にも
自分にも

だせばいいのに

本当、素直じゃないんだから

31・それた道、かくれんぼした心（前書き）

大嫌いな自分を

誰かが好きになってくれるのを
待つ気持ち

自信は持ち合わせていないから
いつも疑う
そんな気持ち

だけど

誰かを好きだから
自分を大嫌いになれる

誰のことも好きじゃないなら
本当に寂しくないなら

自分のことは
大嫌いになれないと思う

だから

私は

自分が大嫌いな私は

幸せものなんだと思う

31・それた道、かくれんぼした心

大嫌いにしかなれない自分の
いいところ

探したけれど見つからない
どうしたって

優しくなれないのは
誰かに愛されたくて仕方がないから
誰かに許されて仕方がないから

いつからかわからない
でも とりあえず
あたしが歩くところは
少しずれていて
少しはじのほうにあった

だからって

見晴らしはよくて
みんなのことがよく見えて
それが嫌ではなかったけれど

前を見ても

後ろを振り返っても
誰もいなかったから
きつと

あたしは淋しがり屋になった

大嫌いにしかなれない自分の
悪いところ

あげてみたらきりがない
どうしたって

善い人になれないのは
嫌われないための偽善だから
本当は真つ黒で汚してしまつから

いつからかわからない
でも とりあえず
あたしが泣く理由は
少しずれていて
少し心の奥のほうにあった

だからかな

心の場所がわからなくなつて
探したけどよく見えなくて
それが嫌ではなかったけれど

みんなと違う、は

なんだかとても不安で
そんな時しか心に会えないから
きつと

あたしは淋しがり屋になつた

腕の中

暗がりの下

星が降る

見えるかな

今日は

淋しがり屋の目に

孤独なふりした

ただの臆病者の心に

32・努力至上主義(前書き)

頑張れ、なんて
簡単に言わないで

32・努力至上主義

言う、と

伝える、は

全然違う

言うのは簡単

伝えるのはこんなにも難しい

それでも

言わないよりは良いのだろうか

何もしないよりは良いのだろうか

ぶつかって

探り合って

結局

得られるものがなかったら

失ってしまったら

それでも

無駄にはならないのだろうか
経験だよって思えるだろうか

ずたずたのぼろぼろになって
痛いのも怖いのも
平気なふりしなくちゃいけなくなったら
それでも

立ち向かわないとだめだろうか
痛み止めは効くだろうか

しっかりしろ、
向上心をもて、
強くなれ、
努力しろ、

ああ、そういうの
もう聞き飽きた

努力至上主義

何をどこまで頑張れば
満足していただけますか

勝手にひいたラインの前で
勝手に決めたゴールの前で
偉そうなこと言うのなら

あなたも走れば良い

息を切らし

汗をかいて

吐きそうになりながら
倒れそうになりながら

あなたも頑張れば良い

そうしたらわかるよ

私が伝えなくなった理由が

誰と比べてるの

今

あなたは

誰のことを見ているの

33・正夢は願わない

声が頭から離れない

夢にまででてきたそれに

私は永遠と責められる

悲しい顔で

怒った顔で

私はいつそ首でもしめてもらいたくなる

汗だくで目覚め

怖くなって走って逃げた

だけど

どこにいても

誰もいなくて

これも夢かしら、と

思わずにはいられなかった

もういい、疲れた

呆気ないほど簡単に諦める

私の頭は

とても都合よく

自分に甘くできている

笑ってくれるかい

それでもいい

そばにいてくれるなら

それでもいい

声が頭から離れない

夢にまででてきたそれに

私は永遠と嘘をつく

平気な顔で

嬉しそうな顔で

私はいつそ舌を切り取りたくなる

頬を何度もつねった

痛くてだけれど夢は覚めない

いつになっても

大丈夫だなんて

言っている自分が嫌い、と

思わずにはいられなかった

ちよっぴり、泣いた

何かが切れないよう

最善の注意を払って

私の頭は

とても賢く

自分と向き合わないようできている

同情するかい

それならいい

可哀相なわけじゃない

それはわかってる

34・風邪ひきの戯言（前書き）

風邪をひきました。

体が弱ると心も弱りますね。

みなさんは

誰かに甘えられていますか。

一人ぼっちだと思い

寂しくて辛くはないですか。

一人でもいい、だなんて

口走ってはいないですか。

誰かに許されて

誰かに甘えられて

初めて人は

誰かに優しくなれて

誰かを大切にできる

のではないかと思えます

みんな寂しいです

みんな悲しくて

明日が

今が

壊れないかと不安です

だから

精一杯

誰かの役に立ちたくて
誰かの隣に立ちたくて

もがくんです

どうしようもなく
かっこわるくなりながら苦笑

34・風邪ひきの戯言

まぶたを持ち上げたら
豆電球のオレンジ色
温かくて ほんのり眩しい
だけど 知ってる
光ってても なんだか悲しい

自由がよかった
息がつかまって 嫌だった
顔色を伺いながら
嫌われる恐怖と戦いながら
生きていて
信じて 何を
助けて 誰に
生きていて
空を見上げるのも忘れてた

いつも場違い
いるようでいなかった
笑ってるようで泣いていた
楽しそうでつまらなかった
そんな空気と隙間が
全身にはりついてはがせなくて

ただ立って居たんだ、そこに
君は気づいてくれたかい

重い頭を持ち上げたら
ちかちか痛みがひしめきあう
痛くて 顔をしかめる
だけど なぜだか
痛くても どこか安心してる

掴まえておいてよ
手をつないで 離さないで
顔色を伺うから
嫌われないよう努力するから
生きていて
信じたいの 何かを
助けてほしいの 誰かに
生きていて
空を見上げて一緒に笑いたかった

いつも遠い
傷つきたくなくて離れた
笑わらないとダメな気がしてた
楽しそうにできなくて悩んだ
そんなどうしようもない自分が
許せなくて悔しくて
ただ立ちすくんだ、そこに

誰かの隣は贅沢すぎた

さよなら

手を振って「またね」の一言
大袈裟じゃなく

本当に嬉しくて泣けたあの日
鍵がなくても帰れる場所

見つけてはしゃいだ
子供みたいに

茜空が優しく見えた
切なくはなかった

35・おかしな話（前書き）

絶望していた世界に

光が差すのはいつだって君といるとき

出会いというのは

まるで奇跡で

奇跡なんて言葉で

片付けたくはないですが

それでもやはり

すごいことには変わりなくて

私自身

とても出会いには恵まれているな、と思います

出会ってなかったら

私はきっと

今

こうしていることもなかったらどうかなと
胸をはっていえてしまうから

35・おかしな話

今夜は君とよく聴いたあの曲と
一緒に眠ることにしようかな
心細い気持が
どこかにいつてしまえばいいな

どこにでもいそうな私と
どこにでもいそうな君が
出会って知りあつて恋をした
ただそれだけのことなのに

面白いほど退屈ではなくて
好きで 好きで
苦しくて 切なくて
どれだけの感情を
教えてもらったんだろう

会いたくて切なくてとうとう
君の声が聞こえた気がした
溢れだした
涙になって愛に変わって

登場人物を数えたら
たった一人の私と君
巡り合つて辿り着いたら
手をつないで次は誰に会いに行こうか

嘆いた弱音は数知れず
傷つけて 痛みを知って
ただただ抱きしめた
どれだけの時間を
あと君と生きられるだろう

始まりが来るように
終わりが来てしまうなら
期待なんかするんじゃない
いつも絶望して
泣いていた方がよかった

なんて思っていたよ
裸足で一人で立っていたから

笑ってしまうほどに
見限っていた世界で
君と出会えたから
私はまだここにいて
何かを望んでいたりする

おかしな話だ、本当に

ねえ

君はどっと思っ

36 矛盾だとしても

ちかちかと流れていく光を
目で追っていきながら
来た道をたどって

今日一日にさよならをする

窓に写ったひどい顔

こんなに疲れてたっけ、と
首をかしげた

ため息ひとつした後で

目の下のくまは見えないふり

なんだか毎日生きているよ

よくもわからないまま

朝は真面目にやってくるから

それにつられて一日を始めるし

これがまともなんですって

決められた生き方

人間らしいねって生き方を

真似しながら

馬鹿のひとつ覚えみたいに

普通、にこだわる

外れないように

ちっともおかしくないように

そうしたら

自分が誰だか

どんな人間なのか

努力家なのか墮落者なのか

どんな性格で

何が好きで嫌いで

趣味とか特技とか

そんなことが

わからなくなった

良い、といわれるところは全部

他人を気にして

そう思われたくて

演じてるだけな気がして

認めてあげられなくなった

悪い、といわれるところは全部

疑うことなく

自分の首を絞めて反省

それでもしないと

自分を許せなくなった

他人を気にしているのも

自分の首を絞めるのも

それはそれであなただよ、と

言われてしまうのかもしれないし

誰かに同じことを言われたら

そう返してしまいそうだけれど

なんだか

悲しいや

よくわからないけど

どうしたって

空しくて悲しいんだもの

37・望むこと、たった一つ(前書き)

それだけでいい

あとは何もいらない

だから、どうか

37・望むこと、たった一つ

疲れた
疲れた

もう眠い

だけど
眠れないんだ

だからね
まぶたが落ちるまで
体が言うことを聞かなくなるまで

私は部屋を明るくして
じっと待つ
孤独が私にもたれかかり
寂しさが私と手を繋ぐ
ちっとも安心だけは
私と仲良くしてくれない

苦しい 苦しくない
そんなの関係ない

どうしたって嫌でも
心はち切れ 体に毒を流す

意味なんてないの
ただゆっくと
あるいは早急な
終わりを待つだけだから

私は部屋を暗くして
身から抜ける
孤独が私を引き戻し
寂しさが私を包み込む
すっかり安心たちは
私から離れていってしまう

堕ちる 堕ちない 堕ちたい
思い出したい
思い出したいくない
会いたい会いたい
会いたかったよ
手を繋ぎたかったよ
抱きしめたかったよ

どうしたって

どうしたって

無理な話

笑っておくれ
泣いておくれ
抱きしめておくれ
愛しておくれ

少しでいい

ほんの少しでいい

そう望むことさえ
許されないだろうか

38・羽根色(前書き)

鳥の羽は何色でも

綺麗だな、と

思うのですよ

それは

たぶん

空を飛べることへの憧れとか

そういうことなのかな、とも

思うんですけどね

鳥は飛びたくないと思ったらどうするんだろう

という発想からできました

残酷かもしれないですけど

歩くのが嫌になるように

飛ぶのが嫌になることだって

あるんじゃないかな、と

見えすぎるのも

自由すぎるのも

どこへでも行けてしまうのも

それは恐怖に変わり得ると、思っているので

38・羽根色

何をするにも

背伸びばかりしていたから

足の爪は剥がれてしまった

もう再生することはないのか

剥き出しの赤色はキレイだった

飛んで逝けるなら

どこまでいこうか

雫った羽根色を

もう思い出せなくて

飛び方も忘れた

苦しくておさえた胸も

今は消えてしまったから

痛むこともないのだと気付いた

もうほしいものも望んでたことも

どこか遠くへ行ってしまえばいいのに

飛んで逝けるなら

どこへいこうか

雫った羽根色が

風に飛ばされていくのを

ただただ見ていた

逝きたくないから筆った
羽根は

あなたに
あなたに

少しでも綺麗に
見えたでしょうか

飛んで逝けるなら
どこまでいけるか
筆った羽根色は
忘れたけれど

今はこうして歩いている
今はこうして生きている

39・荷物、点と線（前書き）

人と人が繋がるということは
難しいことだと思います

上っ面な関係だったら
簡単ですけど

きちんと繋がるのは
とても難しいです

点と線

シンプルに

一人だけでも良い

繋がれたら

とても素敵ですよ

39・荷物、点と線

何もいらない
何もかもいらない
手放そう、全部全部を
そう思つて放棄した今日

動かない身体に
うんざりしながら
思つたことは

荷物なんて
最初から持っていないのに
重たい、だなんて言い訳
疲れた、だなんて弱音
どこから湧いて出てくるのだろう

つていうことだった

寂しいから
賑やかな場所にいた
上手く笑えずに
気付いたら苦しくなつてた

輪から離れて

一人で点になった
思ったことは

何も孤独を

望んでるわけじゃない
たまたま一人が楽なだけ
直線でも曲線でもいい
たった一人を待っているだけ
っていうことだった

これもまた
情けない言い訳にしか
ならないんだろうな
それでもいいか、何でもいい

背負って

捨てて

その繰り返し

大切なものは

ポケットに入れるから大丈夫

繋いで

描いて

切れないように

できたものは

いびつな優しい形

40・独り（前書き）

独りになりたくて仕方がない日があります

すごい寂しがり屋のくせに苦笑

優しさも気遣いも温もりも信頼も

吐き気がするくらい

苦しくなるときがあつて

なんですかね、これ

世界を拒絶してるのか

世界に嫌われたいだけなのか

考えたつてよくわからないままで

ただ

独りだったら

もつと楽だったのかなと

誰かと一緒だからこそ

得られる感情や温もりその他もろもろと
引き換えにして失うものと

独りだからこそ
得られる安定や静寂と
引き換えにして失うものは

どちらが多いのかなーなんて

天秤にかけることじゃないのですけどね

言葉が刺さって刺さって
心に穴がたくさんあいて
そのまま
壊れてしまったらいいのに

なんて

言ったら

どんな顔されるんだろうな

40・独り

きつとね

君の願いを叶えてあげられない

きつとね

君のことを裏切ってしまうよ

だからね

そんな顔して笑わないで

どうか

僕を嫌っておくれ

誰かといると不安になるなんて

どうかしてる

親密が苦手

優しいが苦しい

そのくせ傷つきたくないなんて

本当どうかしてる

きつとね

君の心のように僕はきれいじゃない

きつとね

君の前から姿を消すことになるよ

だからね

そんなに優しくしないで

どうか

僕を忘れておくれ

独りでいると安心できるのは

泣けるからだろう

冬が好き

冷たい朝の空気

春よりも世界が拒絶してくれる

本当どうかしてる

何も知りたくないな

君のこと知りたくない

寂しいとか、悲しいとか

忘れられたら

誰のこと傷つけないで

独りになれるのにな

胸を張って

独りになれるのにな

41・晴れた昼下がりの黒

勝手だなあ、君は
あたしに何を期待してたの
そんなもの持ってないって言ったのに
どんな幻想抱いてたの

触らないでよ
近寄らないでよ
勝手に期待して
勝手に裏切られたような
気にならないでよ

私は何で
心碎かれなきやいけないの
君は何でそんな目で私を見るの
何が欲しかったの
疑問は空しく消えていった
どうでもいい、という気持ちの果てに
ゴミ箱に投げ捨てられた

勝手だなあ、君たちは
巻き込んでおいて
被害者面ができるなんて滑稽だね
君たちの前の顔はもう思い出せない

見ないでよ

話しかけないでよ

勝手に巻き込んで

勝手に傷ついたような

気にならないでよ

私は何で

心碎かれなきやいけないの

君たちは何で私をかまうの

どうせ見捨てるくせに

厄介者はいつの間にか姿を消す

どうでもいい、という人ごみの中に

カテゴライズされて

42. いつか、が来る前に（前書き）

どうしたらいいのか
わからなくなつて
立ち止まった時に

自分の悪いところばかりが
見えてしまいます

あとは

嫌な思い出

悲しかったこと

そんなことばかりが頭に浮かんで
とりあえず

過去を反省

過去を反省した後は
未来を想います

いつかは死ぬのだなあ、とか
そしたらそれはいつなのかしら、と

私はきつと
毒を飲みこんでいるから

あんまり長生きはできないだろうなあ、とも

それなら

今のうちに

誰かを笑わせたいし

誰かのためになりたいと
思うのだけれど

それが上手くいかなくて
失敗ばかりなのですよ

空まわり

空まわり

どうしたものか

すみません、愚痴です
ね
ただの苦笑

42. いつか、が来る前に

ねえ

どこに行く？

ねえ

どこへなら行ける？

どうして、はもう言わない
なんで、はもう聞かない

私

どこに行けばいい？

気がつくよ、というのは建前
仕方なく、というのは言い訳
いやいやで、というのは嘘

知ってた？

人はそうやって

色々なものを

守ってるんだよ

いらないものの前で

いるものの為に

だから

どうやら

正直に生きてはいけないらしい

どうしたって

人は所有したがるから

寂しかった？

苦しかった？

独りよりは良かった？

自分の中の黒い渦
ぐるぐるとぐるを巻いて
私に近づく
近づくのではなく
私に巻きつく

甘くて黒い腐った実
それを知っていて食らう蛇
おそらく毒で死ぬだろう
それが
あと何日後なのか
あと何年後なのか
それは
知らないけれど

蛇はそれを覚悟で
その実を食らい続ける

手も足も寒い
死んだ人みたいだねって
笑われたっけな

うん

でも

そうだね

そうかもしれないね

とつくのとうに
死んでしまっていたのかも

それにただ、ただ
気がつかなかっただけなのかも

そうしたら
大発見だね

奇跡だね

なんで

生きてるんだらう

生きてる、というよりは

仮死なのかな

定義するのは難しい

ただ

研究資料にでもなれるのなら

どうぞ、この身を

お譲りします

ホルマリンにつけるも良し

見世物にするも良し

どうだっていいよ

だって

生きてるか

死んでるか

判断なんかつかないでしょう？

ねえ

笑えた？

それとも

怒った？

こんなくだらない言葉たちを
並べることしかできない私を

どう思う？

残念だねって笑う？

可哀想だねって目を伏せる？

もしくは何も思わない？

何か

言つてよ

何か

43・僕の彼女が小鳥になった

僕の彼女が小鳥になった
綺麗な羽根をばたつかせて
僕の肩にのっっている
綺麗な声で鳴くんだろうな

ねえ

君はなんで小鳥になったの
目覚めて横にいた君は
小さな小さな小鳥になったの

僕は君の頭をなでる
小さくなった君の頭は
相変わらず小さいな
言葉を失くした君に
僕の言葉は届くのかな
久しぶりに口にしてみる
「愛してる」

僕の彼女が小鳥になった
綺麗な羽根を持っているのに
だけど飛べないんだね

綺麗な声でさえずる君

ねえ

君はなんで小鳥になったの
毎晩元の姿に戻ること
祈っているのは僕だけなの

僕は君に口づける

小さな嘴は少し冷たい
君は頭をかしげて鳴く
言葉を失くした君に
僕の愛は届くのかな
抱きしめることもできず
涙で羽根はぬれた

小鳥になっても

君は僕の後を追いかける
飛べない羽根をばたつかせて
小さな足で追いかける

ねえ

どうして

君は小鳥になつたんだい

瞳の中につつまる僕も

どうせなら

小鳥になれば良かったのに

愛してるよ

愛してるよ

伝わるかい

朝目覚めて

僕は君の腕に抱きしめられていた

温かくて小さな掌に

僕は同じ掌を重ねた

僕の彼女がヒトになった

44・鬼にもなれない(前書き)

逃げるも何も

追うも何も

私は参加してない

仲間外れなのではなく

ずっとそれらを眺めていた

それで

かまわないような気がした

欲しがるのは贅沢だと思った

44・鬼にもなれない

あたしの全てを

差し出せたらいいのに

それで

あなたが笑えるなら

あたしはかまわないのに

だけど

あたしが持っているものなんて
少なくて

役には立たないかもしれないね

あたしのほんの一部を

世界が見てくれたらいいのに

それで

見えればいいのに
気付いてもらえたらいいのに

だけど

見えたところで綺麗でもないし
有用なわけでもない
いったいぜんたい
何の意味があるかわからない

探して探して

見つけて見つけて

隠れたんだよ

もう

鬼の役も
逃げる役も
あたしはできない

鬼も逃げる人も
平和になったらいなくなる

そうしたら

あたしは何になれるだろう

そうしたら

あたしはどこに走って

逃げるのか

追いかけてるのか

なればいい

そうしたら

あたしは何になればいい

45・あの続き

ふと、思い巡らし
溜め息に似たそれを吐く
一緒に心臓が出ていかないよう
注意をする

一人は嫌だよね、と
隣に座ったのは孤独
寂しさは私を抱きしめる
これはいつか見た夢の続き
相変わらず
優しさは私に見向きもしない
温かいから気づいてくれない
外はこんなにも寒いのに

ふと、体に目をやり
次は鏡越しに見つめてみる
あとどれくらい生きていけそう
問い合わせはどこに

一人は嫌だよね、と
隣に座ったのは孤独
寂しさは私を抱きしめる
これはいつか見た夢の続き
相変わらず
優しさは私に見向きもしない
温かいから気づいてくれない
外はこんなにも寒いのに

寒いのに
寒いのに

マッチをすって
ライターの炎に焦がれた
でも

本当は
マッチをすってもいなくて

温めてもらうのを待ってる

体育座り
顔をうずめて
耳をふさぐ

46・右往左往（前書き）

どうしていいか

わからなくなるのは

怖いから

助けて、と言えるほどの勇気がないから

それほどに自分に自信をもちあわせていないから

それでも何かにすがりたくてたまらないから

46・右往左往

それは美しくはなかった
綺麗だね、と都合よく
笑ってくれる人もいたけれど

優しくなりたいのに
そうならないのは
結局自分が一番可愛いから
それでもこうやって悩むのは
やっぱりあなたが愛しいから

こんなこと言うのも
理由と論理と証拠がほしいだけの
臆病な僕を見てほしいから
鳴いて助けを呼べるほど
もう可愛くないから

それは美しくはなかった
口にもできないような
黒くて底が見えないような

当たり前なんて存在しないこと
知っているんだよ
失って消えてしまうそれを
それでもこうやって望むのは
やっぱり僕も愛されたいから

こんなこと言うのも
理由と論理と証拠がほしいだけの
臆病な僕を見てほしいから
鳴いてすぎるような
姿は見せたくないから

言葉にしたら
本当になってしまいそうだ

そう思うのは大抵
悪いことばかりで

言葉にしたら
消えてしまいそうだ

そう思うのは大抵
良いことばかりで

選べずに

結局

何も言えないんだ

こんなこと言うのも

理由と論理と証拠がほしいだけの

臆病な僕はどうしていいかわからないから

同じところを

行き来してしまうから

47・僕の彼女が小鳥になった（Answer）

ある朝 私は小鳥になっていた
とても大きくなった君を満て
私はそれに気がつく
羽はあるのになぜだか
飛べない

ああ

君に嫌われてしまうだろうか

私の声は届かなくて
私の存在は透き通って
それなら私はなぜ
君の隣にいるのか
わからなくなつて
いつそ君が好きな鳥になれば
愛してもらえるだろうか
考えたのは
いつのことだっただろう

鳴いてみた 小さな声で
だけど

君にはわからないらしい
これからどうしたら
君に伝えられるだろう
精一杯の「愛してる」

ある朝 私は小鳥になっていた
時々君は頭をなでてくれる
私はそれが嬉しかった
飛べないから変わりに
君の後ろを追いかけた

ああ
君は振り向いてくれないだろうか

私の声は届かなくて
私の存在は透き通って
それなら私はなぜ
君の隣にいるのか
わからなくなつて
いつそ君が好きな鳥になれば
愛してもらえるだろうか
考えたのは
いつのことだっただろう

口づけてみた　小さな嘴で
だけど
君にはわからないらしい
これからどうしたら
君に伝えられるだろう
精一杯の「愛してる」

君の大きな手に
包み込まれて
君の涙で
羽はぬれた

なぜ泣いているの
君の言葉が
わからなくなった私には
検討もつかなくて
とりあえず
「ここにいろよ」と
鳴くことしかできなかった

ある朝　私は小鳥になっていた
愛しい君はヒトのまま
私はそれでもよかった
小鳥の私とヒトの私

君はどちらがよかっただろう

ねえ

君は

どちらがよかっただろう

48・私にできること(前書き)

身長155cmの私には

これくらいしかできないから

48・私にできること

あなたがもし

暗闇の中で

一人さま迷うなら

どうか私も

そこに連れて行って

前に進めと言われたって

前がどちらか

それが正しいのか

わからない時だってあるのにね

暗闇じゃ前も後ろも左も右も

わからないのにね

不安で仕方がないのに

背中ばかり押されて

高圧的な声ばかり聞こえてくる

目をとじるまでもなく

暗闇が迫ってくるのがわかる

「ああ、どっしょいようもない」

そう絶望したなら

そこに

私を連れて行って

あなたの手を握らせて

私の顔なんか

見えなくていいよ

ただただ

あなたに私の体温を伝えるから

あなたがもし

強がりと我慢で

笑っているなら

どうか私に

あなたを抱かせて

大丈夫と、もう何回繰り返したの

どれだけ人に

気を遣って

遠慮して

優しくしてきたの

あなたはそれを
優しさだと認めやしないけど
ただ
嫌われたくないだけだと
偽善だと
自分を蔑んだりするけど

私の目には

あなたは十分頑張っているように見えるよ

あなたが本当に
優しい人なのか
気配りができる人なのかは
わからないけれど

もう

十分頑張ってきたと思うんだよ

そんなことを言っても
あなたはどうぞせ
また認めてはくれないだろうから

私はあなたを抱きしめるね
ぎゅっと
あなたを否定するあなたの口から
言葉がでないくらい
ぎゅっと強く

私はあなたを抱きしめるね

その間

あなたはきつと動けないから
少しくらい休めるでしょう

私を突き放すのは

それからでも良いから

生きることは

とても優しくないし

残酷なことだっただけ多い

絶望も裏切りも悲しみも

たくさんたくさんある

それでも生きてるのは

それ以上の何かがあるか

または

その何かを望んでいるから

今はそう思う

あなたがあなたを
傷つけるのなら

私があるに

包帯を巻きに行くね

あなたがあなたを

否定するのなら

私があるを

全力で肯定するね

それくらいしか

できないんだもの

ごめんね

49・壁の向こうで（前書き）

他人のことは
どうしたって羨ましく思います
憧れます

だって私は
他人が持つてるものを
持っていないから

だから

惹かれ合うし
求め合うのだけれど

努力をしたって
ダメなこともあって

努力をするのが怖くなるくらい
苦しくなることもあって

努力をしても
決してそれが
受け入れてもらえたり
認めてもらえたりするわけではないと

知っているから
諦めそうになる
怖くなる

そしてまた

綺麗に見える他人の世界が
とても羨ましく憧れる

49・壁の向こうで

少し無理をしたみたい
今も手が震えてる
爪を食い込ませた左手は
痛いとも言わずに
お好きなように、と
受け入れてくれた

明日を迎える現実が
とても怖いと言ったなら
ふざけるな、と怒られるだろうな
だから
明日の私と向かい合ってみるけど
何回繰り返し返しても
手の冷たさと疲れた顔に
私はきつと泣きたくなるだろう

互いの知らない影の部分を
上手く切り取って繋げて見せる
だから
君は私を羨ましいと言い
私は君を羨ましく思う
綺麗に見えるんだ

私の目に映る君達の世界

少し無理をしたみたい
今にも臓器が全部出ていきそう
吐き出すものは
何も無いから
仕方がない、と
眠るふりをする

明日を迎える現実が
とても怖いと言ったなら
それでもいいよ、と笑ってくれるかな
なんて
都合の良い妄想を試みるけど
何回繰り返しても
登りきれない頑丈な石の壁に
私はきつと泣きたくなるだろう

互いの知らない影の部分を
上手く取り繕って笑って見せる
だから
君は私を羨ましいと言い
私は君を羨ましく思う
綺麗に見えるんだ
私の目に映る君達の世界

手の皮は剥けて
爪は剥がれそう
この壁の向こうには
何が待っているの
希望かな？
愛情かな？
友情かな？
血だらけの手で
無惨な姿になつた私を
それは受け入れてくれるの

互いの知らない影の部分を
上手く切り取つて繋げて見せる
だから
君は私を羨ましいと言い
私は君を羨ましく思う
綺麗に見えるんだ
私の目に映る君達の世界

50・盗人（前書き）

幸せを奪うのは

結局誰のせいでもなく

自分のせいなんだと思う

幸せを手放すのも

幸せをつかむのも

誰のせいでもない

自分のせい

いくらでも

自分は犠牲にできる

ただその先には

何が待っているのだろう

50・盗人

私の両足は切り取られ
膝から下は見えなくなつた
誰に盗まれたのだらう
誰に助けを求めればいいのだらう

止血はすんだから
とりあえず
腕だけで這っていた
おかしなことに
痛みは苦しくなく
むしろなぜだか
心が落ち着いた

ところで私は
どこに向かっているのだらう
後ろから何かが追ってくる
それだけはわかつていた
首を絞められて
呼吸が止まったのは
その後すぐのこと

目が覚めると
今度は腕がなくなっていた
誰に盗まれたのだろう
誰がこんなもの必要としたのだろう

止血ができなくて
とりあえず
腕を地面に押し付けた
おかしなことに
どれだけ血が流れても
私の息がとまることはなく
鮮明に世界が見えた

ところで私は
この先どうすればいいのだろう
後ろから何かが追いかけてきても
逃げることはできないから
その姿を見てやった
その瞬間
目をつぶされた

もう目が覚めることはなかった
暗闇だけの世界

誰に盗まれたかはわかった
あれはもう一人の私、希望を捨てない私

色んなものを失ったから
とりあえず

諦めようと思った

おかしなことに

身体はとても軽くて

私は私に任せることにした

ところで私は

どこに行ってしまったのだろうか

今度は私が後ろから追いかけて

私から色々な物を

奪っていくのだろうか

そんなことはできないな

もうそんな気力ないものね

もう一人の私が

今の私のようになるのは

あとどれくらいだろうか

どうか少しでも

幸せでありますように

私もあなたも

幸せでありますように

51・両手の行き場（前書き）

冷え症です

極度の苦笑

51・両手の行き場

掌を伸ばし

月の光を遮断して

星の輝きを見た

小さな小さな光も

決して見逃しはしないよ

ゆっくり歩いてみたら

せわしなく通り過ぎていく

人、人、人

私もあんな風だったのかと

横目でなんとなくやり過ごす

両手は冷たいから

ポケットに入れて

白い息に遅れないように

呼吸をする

冷たい空気を肺に

詰め込んでさ

踏切前の信号機の

点滅を見つめてた

灯りが消えない部屋
お気に入りの曲
口ずさんで
口笛は吹けないままで
紅茶が揺れるのを見ていた

気温が下がるのを感じたら
急いでもぐりこんで
独りでも、でも
温もりが消えないようにさ
冬眠でもするみたいに縮こまって

両手は冷たいから
両足に挟んで
怖い夢は見なくて済むように
縫るように願う
相変わらず灯りは
ついたままでさ
瞼をぱちぱちさせて
白と黒の世界

52・生まれるもの、生まれないもの(前書き)

人間だから

傷つくし

悲しいし

間違いも起こすし

自分の存在って何なのか、とか
自分の価値っていかほど、とか

こんな自分嫌だー、むきーって
なったりとか

もう

寂しくて寂しくて

夜も怖くて眠れないとか

私は幸せ者だー、と感じたりとか
誰かを愛おしく思ったりとか

嬉しい!とか

何これ、楽しい!!--とか

色々なことが起こって
色々な感情もそこには
存在すると思うんですけど

やっぱりそれは
一人ではないからなんですよね

悲観的をやめたいわけではなく
楽観的になりたいわけでもなく

素直に

だから

ありがとう、も

大好き、も

愛してる、も

伝えたいと

思っただって話なのです

52・生まれるもの、生まれぬもの

手をつないで
抱きしめて
もしよかったら
あなたの隣に

笑って
怒って
泣いて
もしよかったら
あなたの隣に

疲れて
眠って
寂しげな子供のよう
目が覚めたなら
あなたの隣に

綺麗じゃないから
どこかいびつで
どこか欠けていて

色もはげてたりするの

だから

だけど

それが

時間の経過とか歴史とか思い出とか
そういうもので
時には味がある、だなんて
言われたりして

じゃあ

古いほうが良いのかって
言われたら絶対そうだと
言いきれなくて

そもそも絶対ってどこからの定義？
なんて論争が始まっちゃったりして
どうしようもなくなってる
收拾がつかなくなってる
頭も心も悩み倒すの

だけど

だから

それが

無理やりの理論付けでも

時間のせいでも

何のせいだとしても

結局

簡単に責めることができるのは

自分だけだから

とても悲しくなるの

力不足な自分

愚かな自分

弱虫な自分

素直になれない自分

自分に甘い自分と

一気に向き合って

ごめんなさい、と反省

それから

どうしたらいいのかを

また考える

考えて

考えて

でも

考えるだけではだめなのだ

伝えなきゃ届けなきゃ

自分の想いを

できるだけ

できるだけ

少しでも

ほんの少しでもいいから

気がついたから

気がつけたから

確かめ合うように

そつと

時には力強く

触れ合うの

触れ合って

ぶつかって

優しさにも

愛にも

悲しみにも
喜びにも
出会うの

だって、ほら
一人じゃ何も生まれないから

もちろん
間違いもある
傷つくことも
悲しいこともある

だけど
それは

また笑顔に変えられたらいいね

そんなこともあったねと
いつか笑いあえたらいいね

ポジティブとかネガティブとかではなくてさ
そんなカテゴリの話ではなくて

心の底から
そう思っつていう話

53・それも私、目をそむけていただけで（前書き）

という夢を見ました苦笑

起きた時は汗だくでしたけど

53・それも私、目をそむけていただけで

いつからかさ

四角くて固い部屋に

閉じ込められたみたい

「だって、安全で安心でしょう」

私はその意味もわからなくて
だけど

隣にいた君が笑うなら

私も嬉しくて

まあいいかと笑った

それからしばらく経って

私はとても息が苦しくなった

埋もれてく追われてる

黒い陰

振り返れば足を捕まれる

「安心だって言ったじゃない。安全だって言ったじゃない。」

大人は耳を塞ぐ

私は君に言う

今から逃げよう、一緒に

君は首をふって笑ってた

どうして？

どうして？

一緒じゃなきゃ意味がないのよ

それでも

君は首をふって笑ってた

私の背中をぐいぐい押して

扉の前まで連れて行く

手を振る君と私

仕方ない、と

言い聞かせて

疑問を左の

恐怖を右のポケットにいれて

勇気と思い出を

リュックにいれて背負って

飛び出す

飛び出す

幸せって何

愛してるって何
大人になるって何
希望って何
生きるって何
答えがわかったら
君に教えてあげよう
手をふった優しい君に

君が笑えるように
私も笑えるように
そして
できたら
母と父も笑えるように

両手いっぱい
大切なものを
抱きしめられるように

私は最後に振り返って
四角の部屋の扉が閉まるのを見た

気がつくと
私も子供ではなくなっていて

大人になつていた
逃げたはずの
四角くて固い部屋の扉が目の前に

手は勝手に
ドアノブを回そうとする

「いやだ。いやだ。行きたくないよ。」

すると向こうから声がする

「大丈夫、何の心配もないよ。」
声はとても優しいのに
その姿は見せてくれない

「いやだ。いやだ。それならそちらから姿を見せてよ。」

扉は開いた
黒い塊
赤く腫れた瞳から
涙を流して
私に問う

「何で来てくれないの。大丈夫。みんないるよ。安心だよ、安全だよ。」

黒くのびたその手は私を掴む
冷たくて冷たくて
痛くて悲しくて
悲鳴をあげた腕

ああ、そうか

私は笑う

そういうことが

「私は行かないよ。こちらで待ってるよ。ずっと待ってる。」

私は黒い腕から
恐らく手だと思われるところを
握って座った

手を繋ごう

大丈夫

嘘じゃないよ

ごめんね
怖いと思ってたのは私だった

私は私から逃げている
君も私で

私が大嫌いになった私で
ずっと私のかわりに
そこにいてくれた
幼くて優しい私
私の自由のかわりに
不自由になってくれた私

ありがとう
ありがとう

黒い塊から少しずつ
黒い靄は消えて
あの日まで一緒にいた私が
そこに現れる

扉の間で
私は出会う
手を繋いで
触れて
思いたす

再会は

きっと始まり

私と私が

何かを見つけた証拠

54・それはそれはとても単純なこと（前書き）

やっぱり

大切な人には幸せでいてほしい

もちろん

世界中の人が幸せだったらと思うけれど

私一人に対しては

それはそれは大きすぎることだから

少なくとも

大切な人には

幸せでいてほしい

だから

その為なら

私はいくらでも

力になりたいと思う

犠牲とかではなく

押し付けたいわけでもなくて

ただ

私の大切な人たちが

ほんの少し

無理をしなくてすむように

愛想笑いとか

作り笑いばかりを

しなくてすむように

悩みがあつて

誰かに相談したいけど

迷惑かけてしまうんじゃないか、とか

思わなくて良いように

寂しい時に

一人なんだと思わなくて良いように

嬉しいこと

悲しいこと

傷ついたこと

むかついたこと

どうでもいいようなこと

真面目なこと

を私がききたいと思うから

無力かもしれないけど
傍にいたいと思う

なんでって

言われたら

どうしようって

チキンだから考えたけど

自分が一人になりたくないのかも、とか

役に立ってるっていう実感がほしいだけかも、とか

やっぱり

いやらしい理由はね

たくさん浮かんだのだけれど

きつと

そういう理由もあるんだと思う

私も人だから

寂しいのは嫌で

できたら

誰かの傍にいたくて

存在理由とか
自分の居場所ほしいもの

でも

でもね

一番は
原点は

君が笑うと私も嬉しくて
君が泣くと私も悲しくて

っていう、そんな単純なことだと思った

利害でもないよ
駆け引きでもないよ
難しいことは抜きにして

ただ単純な理由

それ以上でも以下でもない

そんな理由なんだと思う

今日

君が少しでも
笑えますように

54・それはそれはとても単純なこと

君が笑うと私も嬉しくて
君が泣くと私も悲しくて
そんな単純なこと
だから

君が幸せだと
私も幸せなんだと
思えたの

人は人を傷つけるよ
人は人を裏切るよ
だけど

それは裏返し
傷つけられるのが怖いから
裏切られるのが怖いから
一人ぼっちは怖いから
おいてけばりは怖いから

強がって
優越感なんかと勘違いして
沈まないよう
落ちないよう
代わりに

誰かを突き放す

それでもね

人は人を救うよ

人は人を信じるよ

だから

私は人が好き

傷つけあったなら仲直りしよう

裏切りがあつたならまた信じよう

一人なら手を繋ごう

はぐれないように

はぐれても私は君を探すよ

君が笑うと私も嬉しくて

君が泣くと涙をぬぐいたくなる

そんな単純なこと

抱きしめて

3秒数えたら

少し温かいでしょう

とてもとても

伝えきれないような気持ちに

潰されそうになって

息も絶え絶えで

消えてしまいたくなつたなら

私はきつと

君が何を言いたいのか

理解できなくて

良いこと、なんてきつと言えない

触れただけで

伝えたいことがわかればいい、と思うけれど

それは無理な話だから

とりあえず

君の涙がとまるまで

君の怒りがおさまるまで

君の寂しさが消えるまで

君の苦しみが和らぐまで

傍にいさせてね

何も言えないけれど

うっとおしいかもしれないけれど

もしかしたら

余計に苦しくなってしまうかもしれないけれど

いつか

君が言葉を思いついて

誰かに

言いたくて

伝えたくてたまらなくなつた時に
それを逃してしまふのは嫌だから

一番じゃなくていい

ただ

君が伝えたかったことを知りたいから

君が笑うと私も嬉しくて

君が泣くと私も悲しくて

そんな単純なこと

だから

君が幸せだと

私も幸せなんだと

思えたの

君が笑うと私も嬉しくて

君が泣くと涙をぬぐいたくなる

そんな単純なこと

抱きしめて

1分もすれば

きつとぽかぽかになるでしょう

55・笑う 泣く(前書き)

笑うことは

いいことみたい

泣くことは

悪いことみたい

そんなことないと思うのは

私が泣き虫だからでしょうか

55・笑う 泣く

泣くということが
もう少し認められていたら
例えば

笑うことと同じであつたなら

世界はもう少し
優しいものになつたかもしれぬ

あなたの隣にいる人は
あなたは
もう少しだけ
無理をしなくても
意地をはらなくても
良かったかもしれぬ

悲しい時は
わんわん泣いて
寂しいと言えたかもしれぬ

いつから

泣く、ということが

タブーになってしまったんだろう

泣く、ということが
弱くて

情けなくて

だらしないことのように
なってしまったんだろう

大人だって

ただの人間だもの

子供と違うところを数えたら
その少なさに驚くよ

しっかりしなきゃいけないのは
わかってるよ

社会的責任とか
社会的義務とか

つきまといってくるのも
わかってるよ

学校にいつて
会社にいつて
家庭に残って

友人に気を遣って

上司に気を遣って

したくもない笑顔つくって

下げたくない頭を下げて

みんな必死に何かを守ってる

自分の存在理由を考えてる

感謝を忘れられた母親は

疲れた顔の夫に向かって笑う

私のこと、まだ愛してる？とは

聞けないまま

仕事でくたくたな父親は

妻の料理を美味しいと食べる

本当は何を食べても同じ味しか

しないのに

友達とケンカをした子供は

情けない自分を隠したくて

母親にも父親にも嫌われないよう

良い子を演じる

ああ

どうして？

みんなこんなに弱いのに

みんなこんなに脆いの

それでも

踏ん張るのは

それでも

平気なフリをするのは

どうして？

臆病な私たちは

泣くことを忘れたくて

幸せなら笑うべきだ、と

いつからか決めた

だからこそ

笑うことが辛くなった

あなたを

私の隣にいる人たちを

私は注意深く見つめる

いつでも

泣いていいよ、と

言えるように

見栄も意地もプライドも
立場も大人も子供も
どうでもいい

そんなことより

あなたの心が裂けそうで
苦しくて
苦しくて
生きることも
嫌になってしまふことの方が

私にとっては大問題

聞かせて
あなたのお話を

目から落ちる
涙とやらを
私は受け止めるよ

そして
最後に一つだけお願い

私が泣きたくなった時

泣いてもいいよ、と言ってほしい

それだけで私

そのあと

もう少しだけ

頑張れるから

56・春色 桜色（前書き）

桜が咲きはじめていて

春らしい詩を書きたくなりました

優しい色

春色

桜色

56・春色 桜色

桜の花はまだ咲かない
ふくらんだ蕾がうずいてる
だから

いつか見た桜色
あの日見た桜色
思い出して花を咲かせる

夢から覚めれば
寝ぼけ眼で一人を再確認
片付け終わらない荷物と目が合ったとき
からっぽの冷蔵庫が少しうなった

やわらかい風がふけば
ふわり春の匂い
不安と寂しさでざわつく心と向き合つのは
君の声を聞いてからにしよう
きつと きつと
そんなもの忘れてしまつたら

桜の花はもう咲くだろう
ふくらんだ蕾の声を聞く

だけど

いつか見た桜色

あの日見た桜色

覚えてる？と私は呟きかえす

想いを辿れば

ぼつと燈る温もりに

指折り数える君に会えるまで

単純なの、それくらい

やわらかい風がふけば

ふわり春の匂い

切ないと愛しいでせめぎあつ心と向き合つのは

君の声を聞いてからにしよう

きつと きつと

愛しいで溢れてしまうから

歩いて 一步 二歩

桜散る中で

歩いて 三歩 四歩

君に届け

君に届け

やわらかい風がふけば

ふわり春の匂い

愛しいと愛しいでいっぱいになってしまったなら

君の声を聞きに行こう

きつと きつと

私の声は春色をしているよ

57・機械になりとて

眠りにつけない子供たち
孤独をいつから覚えたの
夜と親しくなつたのは
きつと明日が怖くなつたから

行き場のない感情ばかりが
溢れて仕方がないから
もういっそ
人間をやめてみようかと思って
管という管を繋いでみた

目に映る生き物の数だけ
耳に聞こえる声の数だけ
脳にデータを蓄積して
仕分けをしてフォルダ管理
上書き保存をしていくの

眠りにつけない大人たち
孤独に慣れたふりをして

夜にはみんな現実逃避
きつと今日を後悔しているから

あらゆるデータがあるんだから
わからないことなんてない
それなのに

人間の時と相も変わらず溢れてくる
この感情は消えてくれない

目に映る生き物の数だけ
耳に聞こえる声の数だけ
脳にデータは増えるのに
一つ分だけ余ったフォルダ
そこに入るのは誰？

心臓は機械的に動くよ
呼吸も機械的に続くよ
冷たくなつた私の身体に
温もりがあるとするとするなら
それはあの時のあの人の、

ああ

フォルダが今埋まった

目に映る生き物の数だけ
耳に聞こえる声の数だけ
脳にデータを蓄積して
仕分けをしてフォルダ管理
上書き保存をしていくの

目に映る生き物の数だけ
耳に聞こえる声の数だけ
脳にデータが増えたから
容量オーバー、壊れる手前
君のフォルダだけは

君のフォルダだけは保存したまま
私はまぶたを閉じる

58・一日の始まりから終わりまで（前書き）

朝起きて夜寝るまで

みなさんは何を思い

どんなふうに生きて過しますか？

58・一日の始まりから終わりまで

昨日は眠れなかったから
冷たくなった紅茶を飲みながら
カーテンを開けて朝陽を浴びる
今日が始まったなと独り言

淀んだ空気が纏わり付くから
ベランダにしばらく避難
植物と一緒に光合成して
思い切り伸びをする

顔を洗って洋服選んで
一回笑ったら さあ出発
たぶんそんなに良いことが
あるわけじゃない
平凡もしくは疲れる一日かもしれない
それでも
扉を開けて 行くの
みんなよそ行きの顔をして

昨日は眠れなかったから

なんとなくだるい身体は重くて
まぶたは重力に負けそうになる
今日がはやく終われと独り言

同じことの繰り返しみたいで
退屈なデスク、クリック音
気晴らしに階段を駆け降りて
ベンチに寝そべりに行く

歯をみがいて鏡と向き合って
一回笑ったら さあ戻ろう
たぶんそんなに良いことが
あるわけじゃない
平凡もしくは疲れる一日かもしれない
それでも
扉を開けて 戻るのが
みんな真面目な顔をして

空にはもう星が散りばめられてる
三日月がずしり、かかったなら
そろそろ帰ろう
少しのご褒美を買ってさ

靴をぬいで部屋着に着替えて

一回泣いたら さあただいま

やっぱりそんな良いことは

なかったね

平凡よりは疲れる一日だったかもしれない

それでも

まあいつかと 帰るの

意外とさっぱりした顔をして

ただいま

59・恋も愛も

言葉をいくら重ねたら

あなたへの気持ち

伝えられるだろう

あなたの幸せを

願うと唄う私は

何ができるだろう

生きてることが苦しい日も

傷ついて心が折れた日も

何もかもが嫌になっても

あなたの声をきくと

私 笑えるんだ

抱きしめて受けとめた想い

あと何回あなたに恋をして

あと何回あなたを愛せるかな

私の心臓がとまるまで

あと何回あなたに好き、と

あと何回あなたに愛してる、と

言えるかな

永遠を馬鹿にしてた私が
いつからこんなに
永遠を信じたんだろう
あなたとの幸せを
求め唄う私は
欲張りなんだろう

生きてることが苦しいなら
傷ついて心が折れたなら
何もかもが嫌になつたなら
あなたが笑える理由に
私 なりたい

会えない夜 つのる想い
あと何回あなたに恋をして
あと何回あなたを愛せるかな
私の心臓がとまるまで
あと何回あなたに好き、と
あと何回あなたに愛してる、と
言えるかな

あなたの名前を呼ぶ
響くのはどこ

触れたくて
抱きしめたくて

嬉しいを
ありがとうを
寂しいを
会いたいを

こぼれることなく
溢れたもの
伝えたくて

いまもこうして唄う

抱きしめて受けとめた想い
あと何回あなたに恋をして
あと何回あなたを愛せるかな
私の心臓がとまるまで
あと何回あなたに好き、と
あと何回あなたに愛してる、と
言えるかな

私のなかで

私とは違う誰かが叫ぶ

私はそれを

とても愛しいと思うのに

私はそれが

とても苦しくなる

一時のことなんだ

それはわかってる

それでも

やっぱり辛いものは辛い

私にしかわからない痛み

だから寂しくなるんだろうか
でもこれは甘えなのだろうか

誰かを傷つけて

何を確認したいんだ

誰かと比べて

どんな答えがほしいんだ

汚い汚い私

醜い醜い私

愛がからまわってしまっ

私に愛しい、だなんて

言う資格はありますか

誰かを愛する資格はありますか

あともう少し
あともう少し

そう思いながら
手をつなぐ

きつと朝がきて

玄関に吸いこまれていくあなたを
私は見送らなくてはいけない

玄関に行くまでに

何度も何度も

何かを言おうとするけれど

それが何かはわからないまま

だけどそれは

意味をなさないと

わかっているのです

とにかく笑ってみる

「いつてらっしやい」

やるべきことは

恐ろしいほどたくさんある

だから

あなたがいなくても大丈夫

というのは嘘だけれど

あなたがいたら良いのに、と思う

あーでもない、こーでもない、と

話せたのに

時々、どうやって一人で生きていたのか
わからなくなるときがある

どうやって一人をやりすごせばいいのか
わからなくなる

独りで作業をした後や
独りでどこかに行った後は
その時まとわりついたであろう
緊張感や空気や他人との薄い膜を
どう取り除いたらいいのか
わからなくなる

あなたはそういうことではないですか？

私はあなたに抱きしめられたら
少しずつそういうものが
溶けていくのだけれど

62・そうだ、たぶん、そうなのかな

ああ

これは言葉にしておかないといけないと思う

胸が何かで溢れていっぱいになってしまった
よくわからない何か

私にはわからないものが多い

気持ち、というのは

言葉にするのは難しい

伝えようとするのはさらに難しい

だけれど

昔から時々

こっぴう風になってしまっ

悪いものではないと思う

良いものかという

それはよくわからない

ああ

でもあなたに会いたくなるよ、とても
だから

きつと良いことなんだね

いや

でも

あなたに会うまではなんとなく
寂しい気もするから
しゅん、としてしまう

ああ

あなたに会ったときにこれを伝えたいから
言葉にしておきたいと思うんだ

そうか

なるほど

はやく

帰ってきて

きつと帰ってきたら

私は嬉しくて

結局伝えられないと思うんだけど

63・まいへびー

はやく会いたいよ、と
私はあなたに言う

あなたは恥ずかしがって
まだまだでてこない

そのくせ
ぐるぐる
ぐるぐる

私のお腹の中で動いてる

何かを訴えるように
嬉しそうに
悲しそうに
眠たそうに
もどかしそうに

あなたに会いたいよ

今日はまだ

お父さんは帰ってきません

お母さんはあなたとお留守番だね

寂しくないね

本当はお母さん

ちよつと寂しかったりするけれど

あなたがいるもんね

帰ってきたらお父さんに

二人でくつつこう

今日の夜ご飯は三人で

あなたが味わうのは明日かもしれないけれど

三人で食べようね

温かいご飯と一緒に

64・君の話

怖くなんてない

独りで歩いてるわけじゃない

それに気がつけば

そんなに悪いものではない

大丈夫だよ、ほら
その手を貸して

ねえ

さみしかった？

ねえ

怖かった？

それならもう大丈夫

そんな気持ちは誤魔化してあげる
誤魔化して誤魔化して

そのうち本当にしてあげる

嘘でもいいでしょう

あなたが笑ってくれるなら

私はいくらでも

あなたのそばにいてあげる

嘘か本当かなんて

いつかどうでもよくなるよ

時間はいくらでもある

さて、何の話をしようか

くだらない私の話

至らない私の話

つまらないかもしれないね

きつと

嫌になるね

それなら君の話を聞こうかな

私の話より

何倍も面白いはずだよ

笑えなくてもいい

涙を流すような話でなくてもいい

君の口から

君の世界を聞くことが

私にとって大切だから

さて、何の話をしてくれる？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7784/>

あたしと君とあなたの心に

2011年10月30日02時20分発行